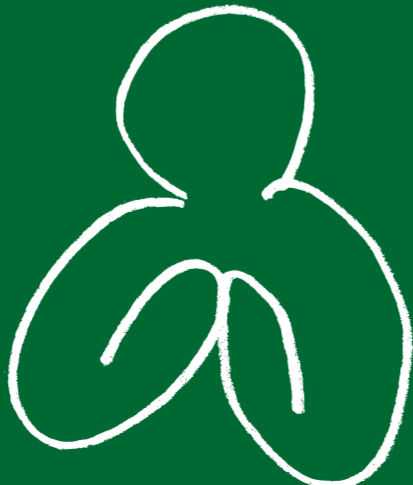




わたしには「これを説く」というものがない。『スッタニパータ』より



【サリュ】…フランス語で「救い」の意

應典院寺町倶楽部主催事業

いのちと出会う会

毎月第3木曜日(8月・12月・1月休会)
 <應典院研修室>
 参加費/一般¥1,000 應典院寺町倶楽部会員・学生¥700
 2月18日(木)18:30~20:00
 第146回「ミャンマーと日本との架け橋に私はなりたい」
 話題提供者:小川モモウさん(中小機構 国際化支援アドバイザー)

グリーンタイム

失った大切な人に思いを巡らせながら、一人でゆっくりと過ごす時間。手紙や作品作りなど、様々なワークから自分に合ったものを選んでいただけます。
 2月13日(土)13:30~16:00 ※お茶会15:30~16:00
 参加費/¥500
 会場/研修室B
 問合せ/griefftime2009@gmail.com(グリーンタイム事務局)
 06-6771-7641(應典院事務局)

應典院寺町倶楽部協力事業

詩の学校

詩ってどうやって、つくらるだろう。ひとりで詩を書いているけど、誰かに読んでもらいたい。そんなあなたのための「詩の学校」です。
 2月17日(水)19:30~21:30
 参加費/¥1,000
 会場/研修室B
 問合せ/poemschool@kanayo-net.com
 ※筆記用具、ノートはご持参ください。

應典院公演情報

真紅組番外公演 team GUYS 「ハイ・ライブ」

1月29日(金)19:30
 30日(土)14:00/18:00
 31日(日)11:30/15:30
 料金/前売一般¥3,000 前売学生¥2,000
 当日一般¥3,300 当日学生¥2,300
 問合せ/090-8201-4620

劇団ゴサンケ 「正義のミカタ」

2月5日(金)19:00
 6日(土)11:30/15:30/19:00
 7日(日)13:30/17:00
 料金/前売 ¥3,000 当日 ¥3,500
 問合せ/gosanke@outlook.com

劇団杏劇屋 「SQUARE AREA」

2月10日(水)15:00/19:30
 11日(木)14:00/18:00
 12日(金)15:00/19:30
 13日(土)14:00/18:00
 14日(日)14:00/18:00
 15日(月)15:00/19:30
 16日(火)15:00/18:30
 料金/前売一般¥3,000 前売学生¥2,500
 当日一般¥3,200 当日学生¥2,700
 問合せ/ichigekiya_office@yahoo.co.jp(西分)

コモンスフェスタ2016 死と生への身構えの回復——これは「私かもしれない」

【会期:2015年12月18日(金)~2016年1月24日(日)】
 死も生も私たちの身の周りにはあふれています。昨日目にしたニュースの事件や事故に、私も巻き込まれていたかもしれない、そんな風に捉えることもできるのでしょうか。心理学者の高木光太郎さんは、ホロコーストを扱った映画「シヨアー」をもとに、第三者のことを思い起こすことで「身構えの回復」がもたらされると論じています。誰かの死と生を巡る物語に触れながら、私の死と生を肉感する、そんな場となることを願っています。

展 示

さらには、やんわり、うかんでる~武田力展~
 1月9日(土)~1月24日(日)10:00~19:00
 会場/2F 気づきの広場
 参加費/無料
 ※アーティストトーク 1月9日(土)19:00~21:00
 ゲスト/武田力(演出家)
 秋田光彦(浄土宗大蓮寺・應典院住職)
 進 行/小林瑠音(浄土宗應典院アートディレクター)

ワークショップ

声について声で考える~アレクサンダー・テクニークxつがくカフェ~
 1月9日(土)10:30~14:00
 会場/本堂ホール(※大蓮寺客殿から変更)
 参加費/¥3,000(軽食付)
 定 員/10名
 ゲスト/納谷衣美(アレクサンダー・テクニーク教師)
 進 行/秋田光軌(浄土宗大蓮寺副住職・浄土宗應典院)

音楽ライブ・トーク

表現のたね・歌の景色
 ~アサダワタル新著&新譜リリース記念ライブ&トーク~
 1月9日(土)15:30~18:00
 会場/大蓮寺本堂
 参加費/¥1,500
 定 員/30名
 出 演/アサダワタル(作家・ミュージシャン)
 細馬宏通(人間行動学者・ミュージシャン)

ワークショップ

少年Aと大人B~匿名・有名・無名な(あなた)と語る~
 1月11日(月・祝)12:00~19:00(入退場自由)
 会場/本堂ホール
 参加費/無料
 進 行/山口洋典(浄土宗應典院主幹・應典院寺町倶楽部事務局局長・立命館大学准教授)

ワークショップ

詩の学校~ことばを人生の味方にしよう~
 1月13日(水)19:00~21:00
 会場/本堂ホール
 参加費/¥1,000
 ゲスト/秋田光彦(浄土宗大蓮寺・應典院住職)
 進 行/上田假奈代(詩人・NPO法人ココルーム)
 申 込/poemschool@kanayo-net.com

ト ー ク

アラフォーから見た終活~相続・葬儀・墓~
 1月15日(金)18:30~21:00
 会場/本堂ホール
 参加費/¥500
 ゲスト/秋田光彦(浄土宗大蓮寺・應典院住職)
 進 行/長井俊之(相続手続支援センターなにわ所長)
 山崎周亮(認定NPO法人エンディングセンタースタッフ)
 岩貞光祐(クリエイティブスタディ株式会社代表取締役)

ト ー ク

懐徳的イスラーム~問いを問い直し教えに迫る6時間~
 1月16日(土)12:00~18:00(入退場自由)
 会場/本堂ホール
 参加費/¥1,500(干したなつめやし「ドイツ」のおやつ付)
 ゲスト/中田考(同志社大学客員教授)
 内藤正典(同志社大学大学院教授)
 進 行/山口洋典(浄土宗應典院主幹・應典院寺町倶楽部事務局局長)
 一ノ瀬かおる(NPOそーね)
 共 催/NPOそーね

ワークショップ

グリーンタイム~喪失は私たちのどこに息づいているのか~
 1月17日(日)13:30~16:00
 会場/研修室B
 参加費/¥500
 進 行/宮原俊也(帝塚山大学こころのケアセンター臨床心理士)
 齊藤由華(應典院寺町倶楽部)
 申 込/griefftime2009@gmail.com.06-6771-7641

ト ー ク

亀について語り、遊ぶ会~スッポン鍋を食べながら~
 1月22日(金)19:00~21:00
 会場/研修室A
 参加費/¥1,000
 定 員/15名
 進 行/陸奥賢(観光家)
 秋田光軌(浄土宗大蓮寺副住職・浄土宗應典院)
 酒井清旭(NPOそーね)

朗読劇・トーク

悼みを悼むということ~「死」の教科書をめぐる朗読とトーク~
 1月23日(土)12:00~15:30
 会場/本堂ホール
 参加費/無料(カンパ制)
 出 演/満月動物園 baghdad café
 進 行/山口洋典(浄土宗應典院主幹・應典院寺町倶楽部事務局局長)

ワークショップ

浪速お化髪行列!~節分魔除けの異形の意味~
 1月24日(日)9:00~18:00(語りとまち歩き13:30~)
 会場/本堂ホールほか
 参加費/¥4,500(着替室利用・行列参加・お弁当含む)
 ¥2,000(見学茶券のみ)
 申 込/naniwaobake@gmail.com
 問合せ/070-5260-8160

ト ー ク

クロージングトーク~死生観を肉感でできたか~
 1月24日(日)19:00~21:00
 会場/研修室B
 参加費/¥500(軽食付)
 ※各プログラムの詳細・お申込みはホームページ
 (http://bit.ly/cfesta2016)をご参照ください。

OUTENIN 應典院寺町倶楽部 TEL:06-6771-7641 FAX:06-6770-3147 info@outenin.com http://www.outenin.com

2016年2月発行【A4版16頁】 第1~9号発行中
 仏教及び生形にまつる数々の現場をドキュメントする特掲載
 http://www.outenin.comにてPDF版を提供中。

應典院寺町倶楽部は1997年5月に発足し、非営利市民活動の基盤づくりと活性化を促し、コミュニティの健全育成を図り、創造性ゆたかな地域社会の発展に寄与することを目的に活動しています。寺院空間を活用した文化・芸術活動のサポーターでありパートナーである方々の参加を広く呼びかけ、随時入会を受け付けています。(会費・寄付は郵便振替口座「00900-2-122125」へお願いします)

冬将軍とはよく言ったものである。12月の中旬まで、人工スキー場でさえも、年末の利用は難しいと伝えられていた。しかし、ちょうどコモンスフェスタが始まる頃、激しい冷え込みが襲ってきた。赤い道付近の海流の変化によって南米付近の太平洋東部で海温上昇が起るエルニーニョ現象が影響しているという。そもそも冬将軍とは、ヨーロッパを征服したフランスの皇帝ナポレオン1世も、ロシアの寒さと雪には勝てなかったことに由来するといふ。自然の猛威は恐るべしである。それから200年が経ち、自然科学の進歩は、どこかで観察主体である人間と観察対象とする自然とのあいだに一線を引かせている。ただ、その反動として、自然科学が発達した20世紀の終わりになると、社会や教育や心理といった人々の動きに関わる現象に対して、経験からの学びを得ようと、人間科学という分野が立ち現れるようになった。今年度のコモンスフェスタのテーマは「死と生への身構えの回復」である。昨年は阪神・淡路大震災から20年にこだわった。今年度も尼崎脱線事故から10年、また東日本大震災から5年など、一定の区切りを迎えるが、なぜ私は今、ここを生きているかに関心を向けた。その企図は副題である「これは「私かもしれない」にも重ねた」。季節は巡る。冬将軍の後には春一番が控えている。しかし、今の日常が明日も変わらず到来する約束はない。今年もまた、有縁のみなさまが安らぎにあふれますように。

(編)



誰かの死と生に触れ
私の死と生を感じる

満月動物園の死神シリーズ第1弾「ツキカゲノモリ」から1年、5タイトル連続上演の最終回となる「ツキノヒカリ」で、12月18日より commonsフェスタ 2016がスタートしました。今回は「死と生への身構えの回復—これは『私かもしれなかった』と全体テーマを掲げ、自らの死生観を感じられる場づくりを心がけています。今年で4回目となる24時間トーク「如是我聞」や、space×drama2009協働プロデュース選出劇団 baghdad caféの公演「会いたくて会えなすぎるあなたちへ」も、それぞれ12月中に行われました。

年が明けて、1月にも様々な場が設けられます。9日から武田力展「そらには、やんわり、うかんでる」を開催する他、今年度を通したイスラームへの取り組みの集大成として、16日に「懐德的イスラーム」という場を開きます。共有の財産を分かち合うお祭りは、24日のクローゼングトークまで続きます。皆さんのお越しをお待ちしています。

12月5日、上町台地マイルドHOPEゾーン協議会主催の「オープン台地in Osaka vol.6」参加企画として、「放談会 伝統の語りと私たち」が開催されました。同企画では、観光家の陸奥賢さんをガイド役に、能楽や落語といった「伝統の語り」のエッセンスを借りたあそびを実践しました。

「伝統の語り」とは「他者に成り代わって騙る(語る)技法」ではないだろうか。陸奥さんのそんなお話に導かれて、参加者同士が禅画中の人物に成り代わって語る「禅画騎り語り」を楽しみました。同日開催の「セッション! 仏教の語り芸」とも響き合う企画となりました。



他者を呼び込む語りの力

ちがいを越えて、ともに生きる

過日、コリアNGOセンター代表理事の郭辰雄さんをお迎えし、ヘイトスピーチについて研修を行いました。日本で起きた事例の映像を交えながら、ヘイトスピーチは人種差別であること、また、国際的な人種差別の問題についてお話を伺いました。そして、「差別の思いを止めるために、異なる他者を受け入れて共生を目指す」という見地を示していただきました。

研修ではこれまでも職員研修を行ってきており、今回は表現の名を借りた暴力について、職員が見識を深める機会となりました。これからも應典院での日々を、丁寧に重ねていけるよう努めて参ります。



芸

Report

見えない世界を可視化
語り芸の魅力を探る

系譜をひもとき型をみる

霜月から師走にかけて連続講座「セッション! 仏教の語り芸」を開催いたしました。2013年度に長野県長谷寺より岡澤恭子さんをお招きし、お釈迦さま涅槃図の絵解きの会を催しましたが、今年度の取り組みは関心を諸芸能の世界へと広げ、語り芸と仏教の関わりを深めました。3回連続での展開にあたり、各回の監修と進行は宗教学者の釈徹宗先生にお願いをしました。

今回、古典と現代の新たな表現の連続上演が最大の特徴でした。そのため、11月25日には節談説教と現代説法パフォーミングから「教え」に、12月2日は落語と現代詩から「弱者」に、12月5日は能楽と浪曲から「死者」に、それぞれ踏み込みました。そもそも、落語や能楽は仏教の説教や説経から産まれたといえます。そのためシリーズの副題に「伝統VS創造」と掲げたのとおり、諸芸能の根源に焦点を充て、語りの型と可能性に接近しました。

各回とも濃密な場が生まれました。第1回では節談説教研究会副会長の直林不退さんと北海道在住の浄土真宗本願寺派僧侶らによる映像と音楽を巧みに織り交ぜた朗読劇や仏教讃歌コーラスのグループ「チームいちばん星」の皆さんとのセッションでした。節談説教とは、七五調による独特の節回しで、大衆の感性に情念で訴える布教の技法です。当日は直林不退さんに源氏と平家の争いに加わった後、法然上人の門に入った鎌倉時代の武将・熊谷直実の物語を、チームいちばん星には牛の解体を扱った朗読劇などを披露いただいたのですが、意外なほど当然なのか、双方ともに説教の「五段法」に沿ったことを、終演後のトークで確認しました。

語り芸の核心にあるものは、豊かに生きるとは、社会的・経済的に成功することだけではないとの教えを紐解いた第1回に続き、第2回ではまちな行き交う人々の暮らし方に迫りました。まず、長らく應典院で「詩の学校」を主宰するコロールの土田假奈代さんが、活動の拠点としている釜ヶ崎の風景を詠んだ詩を朗読、続いて柱文我師匠による「弱法師」の二席でしたが、この回のテーマは「弱者」でしたが、弱さは誰しも持つものであり、むしろ強がる人の振るまいによって人は傷つき傷つけられているのではないかと、といった問いが語りを通じて浮かび上がりました。同時に、それぞれの語りを通じ、まちな風景が想起される回となりました。

3回連続の最終回は中世生まれの能楽と、近代生まれの浪曲との競演でした。「浪花節」で知られる浪曲には死



者が登場しない故沢村豊子師匠の「三味線のもとと玉川奈々福さんが「陸奥賢さん」で田舎から来た使者を語る」と、能楽師の安田登さんが「岡田川」と「夢十夜」で死者を語りました。かたや近代の自我、かたや無名の境地に迫るものでした。ちなみに、能のワキ方とは脇役ではなく死と生の境界線を演じる役である等、トークでも深みがありました。

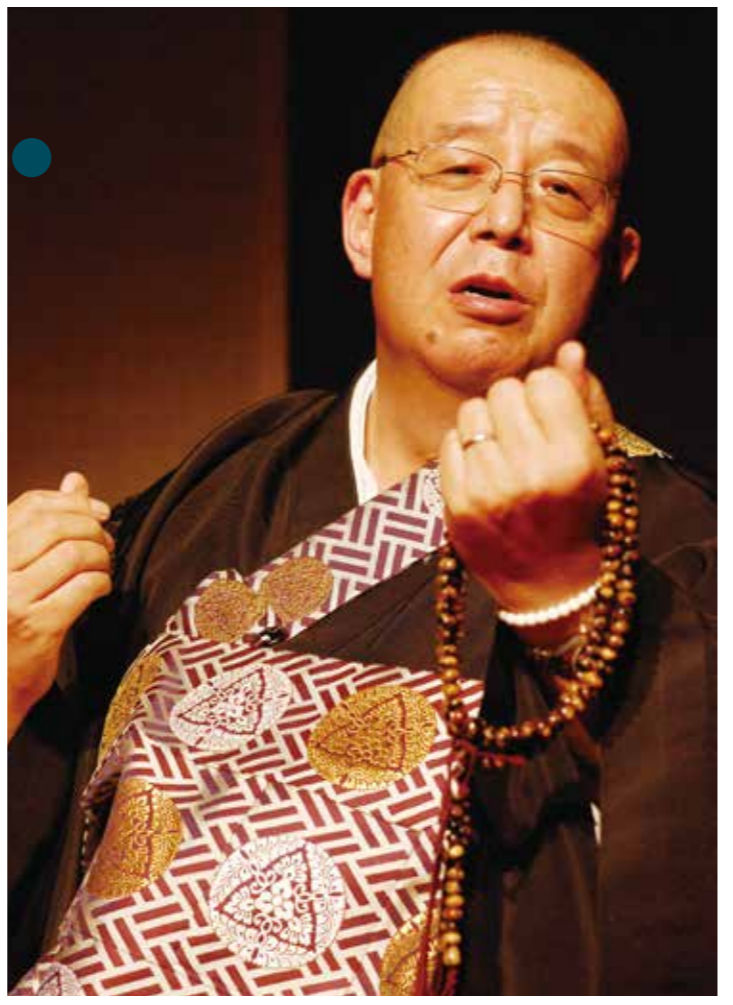
今回の企画は釈先生による仏教学舎・練心庵との共催でした。また第3回には下町の浄土宗寺院の若手僧侶の会「三福会」による声明も披露され、多くの思いと語りがありました。3日間となりましたが、型に埋め込まれた物語の意味に向き合っていました。

Interview

直林不退さん (浄土真宗本願寺派浄宗寺住職)

布教の実践と研究を両立する僧侶が、語り芸の本質について考察する。現代における「伝統的な語り」とは。

振...



「セッション! 仏教の語り芸」の第1回「教えを語る」では、相愛大学客員教授も務める直林不退さんに、浄土真宗に伝わる節談「ふしだん」説教を聞かせていただいた。浄土宗ゆかりの演題である「観経疏説教」は大変雄弁かつ感動的なもので、その有り難さからこぼれる「受け念仏」が会場の隅々から発せられていた。今回、現代における節談説教の意義などについて直林さんにお話を伺った。

「当日も申し上げたように、應典院は非常に語りやすい場だと感じましたし、聞きに来てくださった皆さんが心から教えを求めていらっしゃる。その思いが伝わってきました。普段とはちがう、良い意味での緊張感の中でお話させていただいたらと思っています。節談説教は浄土真宗で花開きましたが、実は浄土宗に由来する安居院流説教が母体となっています。浄土宗のお寺で法然さんについて語るのはおこがましいのですが、大変有り難いご縁をいただきました。」

「いつの時代でも、この二つの次元が車の両輪のように並走っています。どちらが欠けようがダメなんです。ところが明治以降、西洋の合理的な考え方が入ってきて、人々の情念に訴えかける節談説教は片隅に追いやられていきま

「セッション! 仏教の語り芸」の第1回「教えを語る」では、相愛大学客員教授も務める直林不退さんに、浄土真宗に伝わる節談「ふしだん」説教を聞かせていただいた。浄土宗ゆかりの演題である「観経疏説教」は大変雄弁かつ感動的なもので、その有り難さからこぼれる「受け念仏」が会場の隅々から発せられていた。今回、現代における節談説教の意義などについて直林さんにお話を伺った。

「当日も申し上げたように、應典院は非常に語りやすい場だと感じましたし、聞きに来てくださった皆さんが心から教えを求めていらっしゃる。その思いが伝わってきました。普段とはちがう、良い意味での緊張感の中でお話させていただいたらと思っています。節談説教は浄土真宗で花開きましたが、実は浄土宗に由来する安居院流説教が母体となっています。浄土宗のお寺で法然さんについて語るのはおこがましいのですが、大変有り難いご縁をいただきました。」

「いつの時代でも、この二つの次元が車の両輪のように並走っています。どちらが欠けようがダメなんです。ところが明治以降、西洋の合理的な考え方が入ってきて、人々の情念に訴えかける節談説教は片隅に追いやられていきま

Column

いま かんがえる



武田力(演出家、俳優)

幼稚園での勤務を経て、俳優として演劇カンパニーのチェルフィッチュに参加。ヨーロッパを中心に多くの都市で公演を行う。近年はアジア各地に継承される民俗芸能の構造から作品を創作。「糸電話」や「踊り念仏」を題材に、観客自身を俳優と捉え、日常と異なる自身や世界への想像を促す「きっかけとしての演劇」をつくる。今後はフィリピンの演劇祭「Karnabal Festival」との3年をかけた国際協働制作を予定。1月9日から24日まで、commonsフェスタ2016参加企画「そらには やんわり うかんでる-武田力展」を應典院にて開催する。

『そらには やんわり うかんでる』は小学生とのワークショップから構成される映像作品。かつてわたしたちは、なにを考えられるのか? 砂場を「津波で凹凸が露わになった土地」に、生きる限りは大人へと成長しなければならぬ彼ら子どもの玩具を「街の素材」に見立て、平均寿命までの「未来」と、その人生における「問い」を彼らに渡しました。

当時のわたしはこう書いています。「不思議なのは未来を問うているはずなのに、彼らの表情や言葉の隙間に現在が立ち現れてくることです。希望や不安があちこちに滲み入ります。大人以上に実感できて

空

国連によると、現在7歳の子どもの平均寿命は92.3歳。彼らに手渡した「問い」は、5年後の12歳の時点についてのものから、東京オリンピック開催の予定であった1940以降の歴史に基づいて構成されています。つまり、この作品では「1940年に12歳」として、92年生きる子どもたちに1940年から2020年までの過去を含む時間を未来として問いかけています。

さて、わたしたち大人はその応えから、なにを考えるのでしょうか? 過去を引き継ぐわたしたちは子どもたちにどんな現在、どんな未来を手渡そうとしているのでしょうか?

▲セッション! 仏教の語り芸「教えを語る」